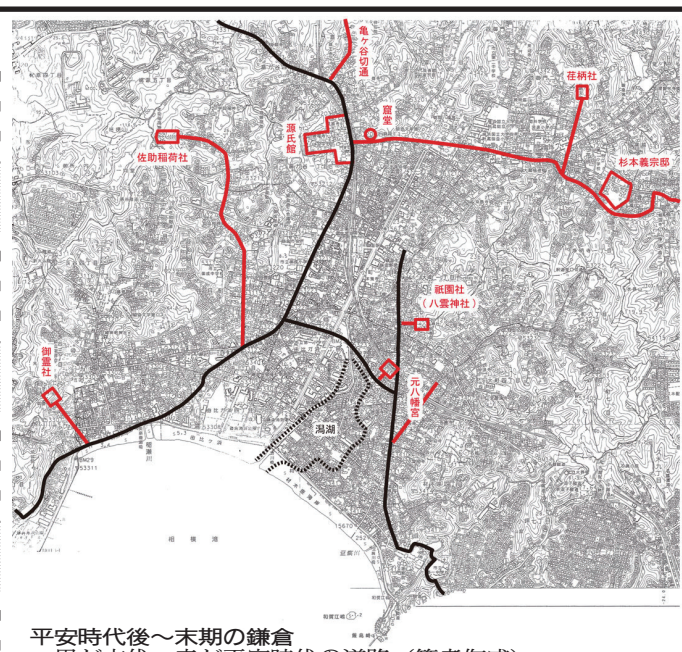
考古学から見た中世都市鎌倉

一般社団法人　鎌倉・中世文化研究センター
所長　馬淵和雄

中世都市鎌倉の研究は、1970年代後半に本格的に始まった考古学の発掘調査により飛躍的に進んだ。しかしその成果を知っている市民は、ほんの少数の歴史愛好家にとどまっているのではないだろうか。この半世紀で判明した新たな鎌倉像を紹介したい。



平安時代後～末期の鎌倉
黒が古代、赤が平安時代の道路（筆者作成）

治承4年（1180）、源頼朝が鎌倉に入って「幕府」を開く。たいていの人にとって、鎌倉史はここから始まるに違いない。だが実はそれは、この地の長い歴史の延長線上に起きた出来事というべきなのである。

周辺丘陵地帯をおもな生活の場としていた遠い祖先たちが、旧市内の平地に住み始めたのは約2000年前の弥生時代中期のことである。鶴岡八幡宮の東方、千年以上のちに頼朝が置いた幕府（「大倉幕府」）の南側に大きな集落が営まれる。後期には由比ガ浜の海岸砂丘にも集落が広がる。古墳時代前期には逗子（中世までは鎌倉郡）の山上に2基の90m級前方後円墳が造られ（「長柄・桜山古墳群」）、後期には由比ガ浜の和田塚付近に少なくとも7基以上の円墳群が形成される（「下向原古墳群」）。後者からは埴輪も数体出土している（現京都大学蔵）。和田塚は明治時代半ばまでは「無常堂塚」と呼ばれる円墳であった。

現代の街構造の原型は飛鳥・奈良時代に始まる。鎌倉の地図から、いや頭の中から鶴岡八幡宮と若宮大路を除いてみよう。するとそれ以前の構造が見えてくるはずだ。7世紀後半から10世紀にかけて、鎌倉には現在の御成小学校校庭を中心に相模国鎌倉郡の郡役所（郡家）が置かれた。1984年の調査で発見された建物群の大きさには誰もが驚くだろう。「乙巳の変」（645年）後に始まった政治改革で列島に「五畿七道」制が敷かれ、初期東海道が鎌倉を通過する。大和から出た東海道駅路（本線）は、平塚市にあった相模国府を出て稲村ケ崎から鎌倉郡中心部に入る。稲瀬川河口の東から北上し、六地蔵交差点手前で東に折れ、閻魔橋で滑川を渡って南下、のち光明寺付近から山を越えて小坪に下り、逗子に向かう。そして葉山大道を経て横須賀走水から房総半島に渡り、終点の常陸国府（茨城県石岡市）に至る。

御成小学校校庭で発見された古代鎌倉郡役所の巨大建物　四角い穴の一つ一つが柱穴
『武家の古都鎌倉』展示図録より

もう一本、六地蔵交差点から郡家に向かってまっすぐ北に延びる道がある。この道はさらに扇ガ谷から北鎌倉に抜ける。現在の今小路から海蔵寺に向かう道の前身である。道はさらに藤沢市大道・長後を経て海老名の相模国分寺に向かう。東海道の支線であり、これを「伝路」という。「大道」は古街道の遺称であることが多い。

平安時代中期、京都ではさまざまな分野で変革が起き、「中世」と呼ばれる時代が始まる。律令制は形骸化して古代的秩序が崩壊し、各地で反乱が起きる。このとき朝廷が鎮圧に向かわせた武士の多くが乱の終結後もその地に定着し、軍事力で覇権を握る。鎌倉における源氏はその典型的な例である。

長元元年（1028）に房総で大乱「平忠常の乱」が起き、朝廷は検非違使平直方を鎮圧に向かわせる。このとき鎌倉が兵站基地となった。鎌倉に「中世」がやってきたのである。房総に渡る港として六浦湾が整備されるとともに、朝比奈峠を越える往還道が開かれた。2年経っても平定できなかった直方は更迭され、代わりに河内源氏の頼信と頼義の父子が派遣される。忠常はかつて常陸国で上司であった頼信に簡単に降伏し、乱は鎮まった。南北朝時代の『詞林采葉抄』によれば、直方は若き頼義の才能を見込んで女婿に迎え、長子（八幡太郎）義家が生まれたとき鎌倉の地を譲ったという。以来実朝までの200年近く、源氏が鎌倉の主となった。源氏が不在だったのは、平治の乱（1159）に義朝が参戦してから頼朝が入るまでの21年間に過ぎない。

源氏の館は後世の寿福寺の場所にあった。頼義から4代目の義朝の館がこの地にあったことは『吾妻鏡』に明記されているが、彼は自分の館を先祖から受け継いだものと言っている（『天養記』）。あらためて、鶴岡八幡宮のいまだ存在しない時代の鎌倉を思い浮かべてみよう。朝比奈峠から下ってきた街道と寿福寺から来る道（「窟屋小路」）が、真直ぐにつながることがわかるだろう。両者は本来1本の道であった。源氏の館として、六浦往還道の起点または終点に当たるこの地以上にふさわしい場所はあるまい。

海岸寄りの古東海道と古代郡家前の南北道、平安時代後期に加わった六浦街道を基本構造とし、その上に鶴岡八幡宮と若宮大路をかぶせたのが現在の鎌倉である。

「東アジア文化都市２０２５」

華やかに鎌倉で閉幕式

閉幕式のフィナーレ（市提供）

日中韓の3カ国で文化交流をする「東アジア文化都市2025鎌倉」の閉幕式が昨年12月2日、鎌倉芸術館で行われ、約650人が観覧した。

この事業は日中韓文化大臣会合での合意に基づき、国が開催地を選定し、その開催地において1年間文化交流イベントを実施するもの。

鎌倉市は、中国のマカオ特別行政区と湖州市、韓国の安城市とともに「2025年東アジア文化都市」に選定され、『千年先の鎌倉へ、はじめの一歩』をテーマに昨年1年間、さまざまな事業を展開してきた。

1月のマカオ春節パレード（派遣）に始まり、中国・韓国の開催都市での開幕式・閉幕式などの（派遣）交流事業、鎌倉での開幕・閉幕式典や平山郁夫絵画展などの特別事業、公募の民間団体等主催事業の助成事業、認証事業など総計93件の事業が行われた。

一昨年（2024）の開催地・石川県は震災により事業が中止となったが、鎌倉の事業に小学生の「能登えんそく」・写真展、金沢のオーケストラの演奏会などを盛り込んだ。

湖州市の開幕式で鎌倉詩吟詩舞連盟が、韓国の祭りと閉幕式では鎌倉能舞台が、伝統芸能を披露するなど他の開催国での交流事業も行われた。

中国で中学生が体験学習

鎌倉に招待した韓国の学生が鎌倉女子大学の学生から着物の着付けや茶道・書道を学んだり、中国や韓国に派遣した鎌倉の中学生が現地で伝統工芸の制作を体験したりするイベントもあり、参加者から大変意義深かったと感想が寄せられた。

中学生が韓国で民謡体験

鎌倉市の2025年度の当初予算としてこの事業に1億8千万円が組まれており、うち7千万円は文化庁（国）が負担する。

昨年12月の閉幕式は、湘南打々鼓の和太鼓で幕を開け、松尾崇鎌倉市長から次期開催地・松本市の臥雲義尚市長にバトンが手渡された。

韓国・安城市のナムサダンバウドギプンムル団のナムサダンノリ、鶴岡八幡宮の浦安の舞が披露されたが、中国は今回出席できず、開幕式で表演されたマカオの広東オペラ、湖州市の歌舞踊「掃蚕花地」がスクリーンに映し出された。フィナーレは出演者全員が舞台に立ち、華やかに幕を閉じた。

東アジア文化都市事業担当の勝勇樹担当課長は「未来につなげるきっかけ、最初の一歩がきれた」と語った。

災害時に巡回救護隊を編成
鎌倉を先頭にさくらネット普及を

山口泰・鎌倉市医師会会長

地震や津波など大災害に見舞われた時に、被災者がいる地域を巡回する医療チームの編成を、鎌倉市医師会が進めている。山口泰・同医師会会長が明らかにした。来年度中に態勢づくりを終えたいという。

これまで災害時には、市内の小学校2、3校に1か所救護拠点をつくり、医師・看護師、歯科医師、薬剤師らが、そこに出動し対応することを考えていた。しかし、孤立する地区や身動きができなくなる人が出ることを想定し、医療側が救護隊をつくって巡回する態勢にする。その場での応急処置や、持病の薬を切らした人への処方も可能になる。

旧鎌倉地区は鎌倉市役所に、それ以外は大船行政センターを拠点に巡回する。協力してもらえる医師はすでにリストアップしており、市の歯科医師会や薬剤師会にも呼びかける。湘南鎌倉総合病院や大船中央病院などとの連携も図っていく。訓練もしたうえで、来年度中には形にしたいという。

また医療・介護情報を地域で共有する「さくらネット」のいっそうの普及も図る。昨年8月、「一般社団法人さくらネット協議会」が設立された。横須賀、鎌倉、逗子、三浦各市と葉山町、横浜市南部の一部をサービス範囲とし、市民の医療・介護情報を、地域の病院、診療所、薬局、介護施設などで共有することができる。

参加する施設は12月初めの段階で、病院26、診療所102、薬局22、訪問介護ステーション22、介護事業所45。しかし、登録した住民はまだ1万6千5百人余りにとどまっている。その中では、鎌倉市民の登録が圧倒的に多いといい、まず鎌倉で大きく普及させ、そのメリットを見せて他に広げていきたいという。

横浜市鶴見区、神奈川区、港北区では、同じような医療情報共有システム「サルビアねっと」が発足している。双方から広げていって、いずれはつなぎ、さらに他の地域に拡大していく構想だ。

やはり医療情報の共有をうたうマイナ保険証との違いを、山口会長は強調する。

「マイナ保険証の情報は少なすぎるし、更新が遅すぎて実用性がない。さくらネットなら血液検査の結果、レントゲン、CT、MRIなどの画像、内視鏡の所見など多くの情報が直接見られる」

また鎌倉市で乳がん検診の中心だった同市笛田の湘南記念病院が、来年3月で外来診療や検診を終了することから、医師会として検診対応期間を延長するなどの対策をとる。

鎌倉といえば・・・
鳩サブレー

豊島屋
http://www.hato.co.jp